

試験研究成果普及情報

部門	麦及び雑穀	対象	普及
課題名：水田転換畑における大豆「サチユタカ」の無中耕無培土栽培法			
<p>[要約]「サチユタカ」は、6月中から下旬播種の場合、栽植密度を15本/m²程度とすることにより、無中耕無培土栽培で倒伏を軽減しながら目標収量を得ることができる。また7月播種の場合は、20本/m²程度に栽植密度を高める必要がある。汚粒と裂莢損失を防ぐため、機械収穫は葉柄が落ち始め、茎水分が概ね50%以下となった時に行う。</p>			
キーワード：大豆、サチユタカ、播種期、栽植密度、倒伏、収穫適期			
実施機関名	主 査 農業総合研究センター生産技術部水田作研究室 協力機関		
実施期間	2003年度～2004年度		

[目的及び背景]

実需者の要望が高い「フクユタカ」の栽培面積が増加しているが、6月中～下旬の播種では倒伏しやすくなり、また、その中耕培土作業は、7月中旬の播種作業と労力競合を生ずるため、早く播種しても倒伏しにくい「サチユタカ」の導入が進められている。そこで、大型機械による省力的な栽培体系を確立するため、「サチユタカ」の無中耕無培土栽培への適用性と、倒伏を軽減し収量を向上させる播種期と栽植密度について明らかにするとともに、茎水分に起因する汚粒と裂莢損失を防ぐために、収穫適期の判定基準を明らかにする。なお、試験は、明渠、本暗渠並びに補助暗渠が整備された転換畑において、条間60cmの栽培条件で行った。

[成果内容]

- 1 「サチユタカ」では、中耕培土を行わなくても倒伏しにくく、粒厚7.3mm以上の子実重（以下、子実重）に及ぼす影響も小さい（図1）。
- 2 6月第3半旬播種と6月第6半旬播種との主茎長の差は認められないが、7月第3半旬播種では短くなり、一次分枝数も減少する（図2）。
- 3 子実重の目標を300kg/10aとした場合、莢数としては600～800個/m²が必要であるが、900個/m²以上の莢数では、機械収穫に支障となる中（3）程度（倒伏角45°）を超える倒伏が発生する（図3）。
- 4 いずれの播種期においても高密度化に伴って莢数は増加し、6月中～下旬播種の場合、15本/m²区で子実重300kg/10a相当の莢数に達するが、7月中旬播種で同収量水準の莢数を得るには、これよりもやや多い、20本/m²程度を必要とする（図4）。
- 5 機械収穫時の汚粒と裂莢損失の発生を防ぐため、葉柄が落ち始め、茎水分50%程度の時に行う（図5）。

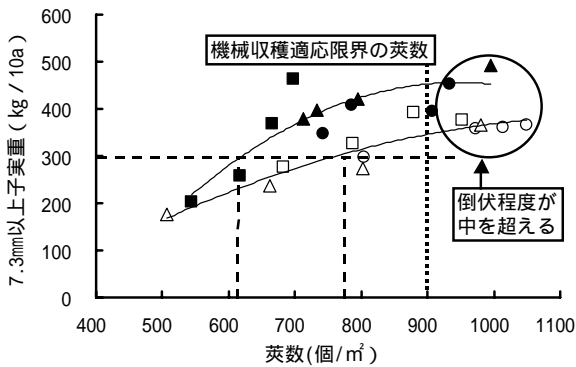
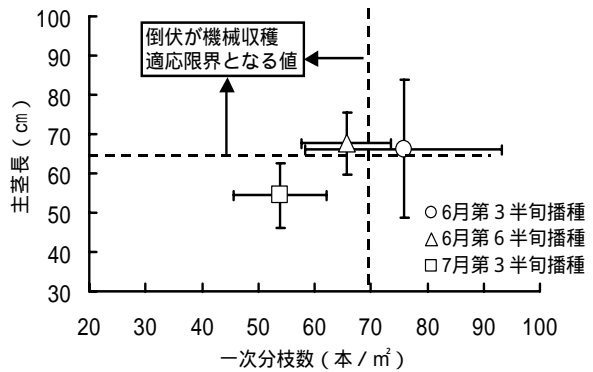
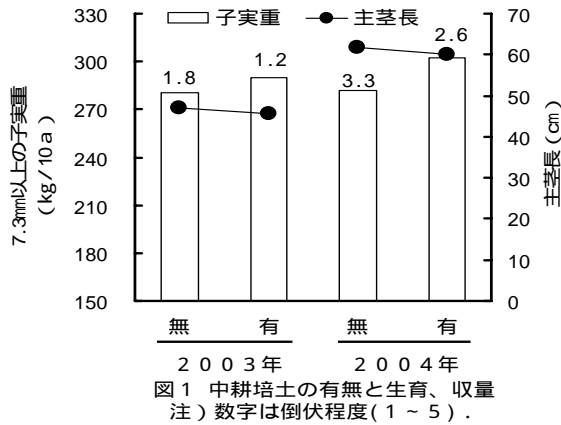
[留意事項] 暗渠、明渠及び補助暗渠等により排水性が確保された転換畑で適用される。

[普及対象地域] 県下全域

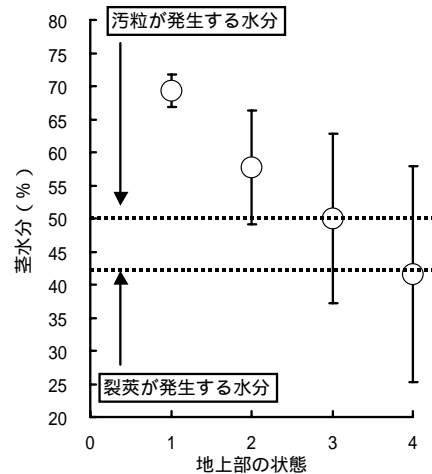
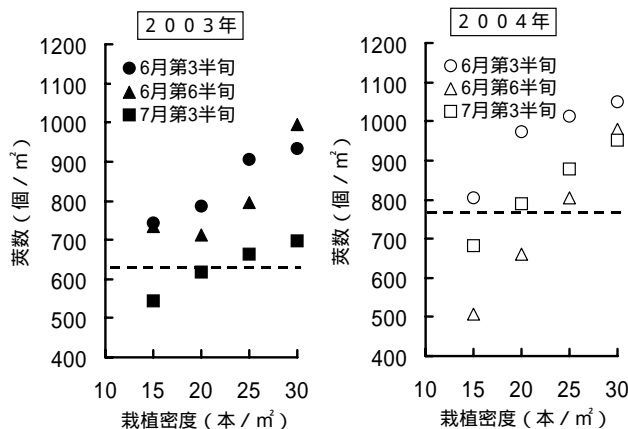
[行政上の措置]

[普及状況] 平成 17 年に奨励品種として採用され、作付面積は本県大豆栽培面積の 6 % に相当する 64ha に達した。

[成果の概要]



● 2003/6/第3半旬 ▲ 2003/6/第6半旬 ■ 2003/7/第3半旬
○ 2004/6/第3半旬 △ 2004/6/第6半旬 □ 2004/7/第3半旬



1 : 葉柄は緑色を呈している
2 : 葉柄は褐色を呈し残っている
3 : 葉柄が落ち始めている
4 : ほとんどの葉柄が落下

[発表及び関連文献]

- 1 平成 17 年度試験研究機関成果発表会作物部門資料 p. 7 -12
- 2 日本作物学会関東支部講演会資料、第 20 号 (2005) p. 76-77

[その他]